萩原朔太郎作品の教材史についての考察

――「竹」を中心にして――

幾田伸司

1　はじめに

本稿では、戦後高等学校教科書における萩原朔太郎作品の教材史を考察し、戦後詩教材史の一端を明らかにすることを試みる。萩原朔太郎は、詩史上の評価の高さもあり、戦後の高等学校教科書で非常に多く採録されてきた詩人である。採録作品の多様さ、採録頻度の高さ、採録期間の長さから見て、高等学校詩教材を代表する詩人の一人であると言えよう。一方で、彼の作品の採録においては、時期によって作品の差し替えが頻繁に行われてもいる。したがって、朔太郎作品の教材史を考察することは、詩教材の採録に作用した要因を検討する際にも有効な観点を提示するものと考えられる。

教科書に採録された朔太郎作品の中で、比較的早い時期から採録が始まり、近年でも多く採録されている作品が「竹」[*1]である。本稿ではこの「竹」を取り上げ、「竹」の教材としての解釈や意義と教科書採録との関連についても考察を行い、朔太郎作品の教科書採録に作用した要因を検討する。

2　高等学校教科書における朔太郎作品の採録状況

表は、戦後高等学校教科書に採録された萩原朔太郎作品を、管見の限りにおいてまとめたものである。[*2]

朔太郎作品の採録は、戦後最初期の検定教科書『新国語　われらの読書』（三省堂　昭和二五年度）から始まっている。しかし、昭和二〇年代での朔太郎作品の採録頻度は近年に比して高くなく、昭和二九年度では、詩史や鑑賞の解説文中で扱われたものが述べ採録数の半数を占めている。この時期での朔太郎作品の採録は、詩史上の評価の高さから模索されてはいたものの、本格的には始まっていない。このような当時の詩教材の採録傾向と朔太郎作品の教材としての評価については、「遺伝」を採録した『高等国語　三訂版』（三省堂　昭和三一年度）の指導書に次のように記述されている。[*3]

教科書などにおいては、詩といえば、藤村・晩翠あたりの初期のものに限る場合が多く、まれに朔太郎にまで及んでも、真

にその詩風を示すに足る作品は採っていない。それには、もちろん、それだけの理由があるのであって、朔太郎の病的な、異常な感覚、それに伴なう難解な表現が、取り扱いに困難を感ぜしめるからである。

「病的な、異常な感覚、それに伴なう難解な表現」から敬遠されがちであった朔太郎作品が本格的に採録され始めるのは、昭和三〇年代前半からである。この時期には鑑賞教材としての朔太郎作品の採録が増えるとともに、採録作品が多様化し、採録頻度も高くなっている。またこの時期には、「病的な、異常な感覚」とされた朔太郎の詩風が顕著に表れた「遺伝」のような作品の採録も見られる。ただし、この時期の採録作品で最も頻度が高いのは「小出新道」であり、この作品は昭和五〇年代まで高い頻度で採録され続けている。「小出新道」の他に「竹（一）（二）」「大渡橋」「旅上」など、長期にわたって継続採録された作品はすべてこの時期に出そろっており、朔太郎作品の採録の祖型はこの時期にほぼ完成している。

「現代国語」になった昭和四〇年度以降、朔太郎作品は全体の八割を超える教科書で採録されるようになり、高等学校教材として完全に定着する。この時期には、詩教材自体の採録傾向が、近代詩から戦後詩を含む大正・昭和期の口語自由詩を中心とした作品へと移行し始めており、朔太郎作品の採録の増加もこれに呼応したものとなっている。また、この時期でも「小出新道」の採録頻度が最も高い。昭和四〇年代の採録作品は、憂愁や倦怠といった詩情はともなうものの、「病的」「異常」と形容されるような作品や虚構性の強い作品は昭和三〇年代に比べて減少している。この時期では、こうした詩風の作品の採録に対しては否定的な傾向が強い。

昭和五〇年度には刊行された全出版社の教科書に朔太郎作品が採録されるが、その傾向には再度の変化が生じている。この年度に採録された作品の中で、昭和四〇年度にも採録されていた作品は「青樹の梢をあおぎて」「小出新道」「自然の背後に隠れている」「竹（一）（二）」の五編なのに対して、新規採録は「こころ」「艶めかしい墓場」をはじめとする八編である。また、「遺伝」「夢に見る空き家の庭の秘密」など、いったん採録が途絶えていた作品の再採録もなされている。採録作品の多様化が進むと同時に、昭和三〇年代でいったん模索されながら継続しなかった特異な詩風の作品の採録が再び図られ始めた時期である。

昭和五九年度は、採録作品の過半数の十編が昭和五〇年度の採録作品と重複しており、基本的には昭和五〇年度の傾向を踏まえたものとなっている。一方で、文語詩には採録されない作品が増加する。それまで高い頻度で採録され続けていた「小出新道」の採録がなくなり、代わって「竹」の頻度が高くなるのもこの時期からである。これは、文語詩が減少し、戦後詩を中心とする口語詩が中心になっていくという詩教材全体の採録傾向とも重なっている。

平成七年度では、三省堂『現代文』が十編を教材化しているために多様化が進んでいるように見えるが、この教科書を除けば新規採録は「月光と海月」「殺人事件」の二編のみである。一方、「遺伝」「竹（二）」「旅上」に見られるように、特定の作品へと採録が集中する傾向が強くなる。こうした傾向は詩教材全体にも見られるもの

であり、朔太郎作品の採録もこの傾向を反映している。

高等学校教科書における朔太郎作品の採録は、昭和三十年代前半から本格的に始まり、昭和三〇年代後半以降に完全に定着した。また、昭和三〇～六〇年代では様々な作品の採録が図られ、採録作品の多様化が進められた。この間には、「病的」「異常」と形容される作品や文語詩に見られるような、時期による採録作品の交替も起こっている。現在では、新たな作品の教材化が模索されるとともに、「竹」をはじめとする特定の作品についての教材としての評価が確定した状況にある。

3 「竹」についての検討

3.1 主題の解釈

「竹」は、朔太郎作品の中で最も長期にわたって採録され、近年においては最も採録が集中している作品である。そこで、朔太郎作品の解釈と教材史との関わりを検討するために、「竹」が教材としてどのように読まれたてきたかを検討する。

「竹」において、作中の竹が朔太郎の内面心理を表象しているという解釈は広く共有されている。一方、この作品を朔太郎の「病的な、異常な感覚」の表象と読むかどうかで、解釈には違いが生じる。作品に即していえば、第一連と第二連のどちらに重点を置いて読むかで、作品解釈が異なってくるのである。

研究者の鑑賞では、第一連に重点をおいて「竹」に朔太郎の不安を読む解釈が早くから提出されている。たとえば伊藤信吉は、地上に直立する竹と地下の根を対比させ、「竹の根」に朔太郎の心象の表象を見る解釈を提出している。伊藤は、「竹」について、「これらの詩にはある病的な神経のふるえがあり、感覚のするどい傷(いた)みがある。作者がここで語ろうとしたのはそういう内面の傷みと、戦慄(せんりつ)にも似たその神経作業である。」とし、この竹を「作者にとっての生命の象徴である。」ととらえた上で、次のように述べる。[*4]

しかし第二の「竹」にはこういう暗さはない。それはむしろ竹そのものについてのイメージや、竹についての感覚的な触れ方を象徴的に表現したもので、そのイメージをとおして、読者は現実のそれとは別の鋭直な植物を感知する。第一節の「根の先より繊毛が生え、かすかにけぶる繊毛が生え、かすかにふるへ」という部分は、それとして繊細な感覚の働きをしめしている。それはあたかも作者の感覚が、繊毛のようにこまかく生きてはたらくことを感じさせ、生命の内部の繊細な感覚をつたえて戦慄するかのようである。第二節は「地上にするどく竹が生え、まつしぐらに竹が生え」と、直角に立つ竹の生命をしめしているが、これはまた神経的な緊迫性をともなって、作者の傷々しい姿をおもわせる。「青空のもとに竹が生え、竹、竹、竹が生え」という言葉は、竹のイメージの表現として、または作者の内的世界の緊迫や神経の傷みのあらわれとして、きわめて独創的な詩的情操を形成している。

伊藤は、第一連で示され、第二連の竹の生命的な描写と重ねられ

た「作者の傷々しい姿」をこの詩の主題としてとらえている。「竹の根」に表象された朔太郎の心象にこの詩の主題を読むこのような解釈は、比較的早い時期から詩人や研究者によって提出されている。

教材としての解釈においても、伊藤のように第一連と第二連を対比させ、第一連の「地下の根」に苦悩や不安といった生命の暗部を、第二連の「地上の竹」に意志や理想といった明るさを読む点は共有されている。しかし、教材としての読みでは、第二連を前景化し、この作品に生命力や成長といった「明るさ」を読む解釈も提出されている。このような明るさを前景化した典型的なものが、西郷竹彦の解釈である。西郷は、小学校五・六年でこの作品を扱う際の教材研究として、次のような作品解釈を行っている。[*5]

しだいにほそらみ、けぶり、ふるえる竹の生命の、しかし、そのたしかな存在感をこの詩の前連はみごとに描き出してみせます。それは、すでに竹でありながら、竹ではない生命そのものとも名づけるべきものの見えざるいとなみを眼に見せてくれます。

後連は、地上の竹のイメージです。前連で〈光る地面〉と形容された地面がここでは〈かたき地面〉となっています。それは、この世界の硬いイメージと、さらにはそれを突きぬけていく竹の剛直なイメージをつくりだしています。

（中略）

前連と後連は、同じ竹というもののまったく対照的な姿を対比して見せています。それは、女性的と男性的、軟に対して硬、繊細に対して堅固、やさしく弱いかすかなものに対して、つよく、はげしく、鮮烈なもの……といったふうにです。

この「竹」の詩を小学校五年生のクラスで授業したとき、子どもたちに「竹」という題名のかわりに自分の考えた題名をつけさせてみましたら、「いのち」「生命」「生命のすがた」「人生」「成長」といったふうなものが圧倒的に多く出ました。（中略）まさしく、「竹」は竹をうたうことによって生命というものの相（すがた）をみごとに表現したといえましょう。

西郷の解釈は、第一連と第二連の対比をおさえた上で、矛盾するものを抱え持って直立する竹に「生命の相」を読むことへ収斂してゆく。これに対して、瀬古正美は「あまりに上昇志向的、健康的であるのが気になるところである。」と指摘し、こうした解釈は「対象が小学校五、六年であったことが大きく影響している」ととらえている。瀬古は、「小学生の学習の場合、生徒の生活感覚を基本にしての読みが意図されようが、それがこの『竹』の読みにはむかないのである。むろん、『竹』が竹のすがたを描くにとどまらない、という読みには至っているが、読みとった竹のすがたが一般的な竹のイメージから一歩も脱することができていないため、ごく常識的に、地下の根にささえられた竹がすくすくと成長していくような力強い人生としか読めないのである。」として、西郷の解釈を否定的にとらえている。[*6]

西郷の解釈とそれに対する瀬古の批判は、この作品において対立する二つの解釈を典型的に示している。ただし、西郷のような解釈

が、瀬古の指摘するように対象とする学習者の年齢に影響されたものだとは言えない側面もある。たとえば、「竹」が主として扱われる高等学校では、小松郁子が次のような解釈を提示している。[*7]

一連三行目の根にからませて四行目の出だしに根が持って来られ、その細らむ根にからませた五行目の根の先が持って来られ、繊毛が生えがまた六行目で脚韻めいた繰り返しになり、七行目のかすかにが一連最終行のかすかに、とからまりながら、細まりながら、微妙に鋭くわけいっているこのことばのつかいざまは巧みである。かすかにからまりあい、ふるえあい、もつれあう内部の暗さ、暗さの中へ中へとのめりこむようなこの感じに対して、一連一・二行を受ける二連全行の、無限に生えつづける竹はすっきりとした線状を呈し、強い意志を否応なく感じとらせる「まっしぐらに」という語をはじめ、使用されている語は「鋭く」とか「りんりんと」という風な、緊張感を持つ語であって、志向する向うに、明るんだ青空をみているという感じもするのである。

小松の解釈は、第一連に「暗さの中へ中へとのめりこむような」感じを読んだ上で、第二連から強い意志や緊張感を読み取り、「志向する向うに、明るんだ青空をみているという感じもする」という主題に落ち着いていく。西郷ほど極端ではないものの、これも第二連に焦点化した解釈であるといえよう。

また、中央図書昭和四〇年度版指導書は、「竹」の主題を「竹のイメージによる神経的な哀傷である。潜在的であったものをおし出そうとする生の意欲、地面に直角に立つ竹の気稟、むき出しにされた神経、それをあわれぶかげに、うすき毛の情緒がつつんでいる。」とし、「竹」の明るい部分を前面に立てた解釈を提示している。また、同書の「研究の手引き解説」には、次のような解説が付されている。[*8]

「竹Ⅰ」「竹Ⅱ」を通じて、「竹」のよまれ方は、二つの方向をとっている。一つは地上にするどくつらぬき生える竹であり、他は地下にひろがり、けぶりふるえる竹である。

（中略）

②（「竹（二）」の第一連・筆者注）は「地下に」「けぶれる」根が「ひろごり」「しだいにほそらみ」、根の先より繊毛が生え、「かすかにけぶる」、「かすかにふるへ」る。地下に沈湎する詩人の細やかな鋭い神経のすがたである。この苦渋にみちた内部感覚はふるえ、けぶり、ひろがり、やがてその力を結集して、地上へ天上へ鋭く伸びることを指向し、さらに伸長せんとする。「竹Ⅰ」ではその間に「なみだたれ」「懺悔をはなれる肩の上より」と祈る姿を、導入して、奇しきイメージを構成している。

ここでも、地下の竹の根を「苦渋にみちた内部感覚」としながら、「その力を結集して、地上へ天上へ鋭く伸びることを指向し、さらに伸長せんとする。」という相対的に明るい解釈へと収斂している。

一方、筑摩書房昭和六〇年度版指導書では、分銅惇作がこの作品

の主題を次のように述べている。[*9]

「竹」は地下と地上の明暗二重のイメージで、作者の内面の生命感覚、その緊張と痛みを表象している。二連に分かれ、全十三行の文語自由詩であるが、第一連は地中の竹の根、その先端にふるえる繊毛までが透視的に映し出され、作者の病的な神経の痛みを感じさせる。第二連は地上に伸びていく竹が、するどく生動的に描かれ、作者の意志的な姿勢を暗示するものになっている。

また、鑑賞の留意点として、「明と暗のイメージで地上と地下とを対比して、作者は自分の内面で矛盾し相反する二つの心の動きを視覚的に表現している。」[*10]とも述べる。分銅も「作者の病的な神経の痛み」と「作者の意志的な姿勢」を対置させてはいるが、矛盾する両者を総体的にとらえており、後者を前景化させた解釈には収斂していない。

教材としての「竹」の解釈では、研究者の鑑賞とは異なり、主題に生命力や朔太郎の生への意志を読む解釈が提示されてきた。これらの解釈は、主として昭和四〇年代に提出されたものである。一方、第二連を前景化せず「作者の病的な神経の痛み」も主題とする分銅の解釈は昭和六〇年度のものである。これは、「病的」「異常」な作品の採録に否定的であった昭和五〇年代までと、そうした詩風の作品の再採録が図られた昭和五〇年代以降の採録傾向の変化と対応したものとなっている。

3．2　実践における学習者の受容

前節では、教科書編集者や教師による解釈の変化を検討した。では、教室の学習者は「竹」をどのように読んだのだろうか。

加藤富一は、「竹」と「遺伝」を取り上げ、「竹」と「遺伝」にはどのような相違があるか、また、朔太郎は「竹」のときと「遺伝」のときと、どのように変わったかを小論にまとめさせ、できあがった小論をクラスで検討した実践を報告している。そこで報告されている学習者の小論は、以下のようなものである。[*11]

「竹」は、全体の文調・雰囲気、題材自体から見て、朔太郎の人間に対する理想を述べているようである。だが単なる理想ではなく、実際の人間の弱さ、もろさをも、充分把握した上で、人間の姿を竹の様子に見たのである。そうした「竹」という詩を書いた時点の朔太郎には、人間の理想を追求しようという熱意がうかがえる。

一方「遺伝」は、全体的には一種奇妙な怪しい雰囲気が醸しだされ、そこには、人間のより深く内面的なもの、恐怖、おびえに対する鋭い洞察が見られ、「竹」に比べて、人間の精神の奥底を長い間追求し続けた結果が表れている。

この学習者は、「竹の根」に表象される「人間の弱さ、もろさ」をふまえたうえで、「竹」に「人間の理想」を見ている。この小論に対するクラスでの検討では、「まず、『竹』が理想を述べたものであり、『遺伝』が人間の精神の奥底を追求し続けたものとした点に、

鋭い感受性を認めると言う。（中略）『けぶる繊毛』は弱そうである。だが、地下のそれに支えられた地上の竹は、「するどく」「まっしぐら」に生える。そこに、朔太郎の、人生に対する理想を読みとったものととして賛同しているのである。」と、全般的に肯定的な評価が与えられたことが示されている。その上で、両者の共通点として「不安」が指摘されたことも加藤は述べている。[*12]

「竹」では、地中の微弱な繊毛と、地上の賢固（ママ）な竹の幹と、この両者の危険な不均衡、「遺伝」では、本能や宿命に恐怖を感じるという点、それらに作者の過敏な神経が見られ、それが、えたいの知れない不安を作者に感じさせる。そして、その不安を蔽い隠して、手のとどかないところに理想を構築したのが「竹」であり、「不安」は一応去ったかに見えるのが「竹」である。一方、「遺伝」は「不安」の本質は「ふるいふるい記憶のはて」から続いているものであることを見きわめ、そこに「あわれな先祖のすがた」、そして、あわれな自己のすがたを冷徹に見つめる。恐れは存在する。しかし、本質を知った上での恐れである。「竹」のような糊塗ではない。このように、両者は「不安」という共通項の上に立ちながら、その共通項は、すでに表面に理想を掲げたそれと、内奥に本質を悲しく読み取ったそれとの差異を、すでに内包した「不安」なのである、という考え方なのである。

加藤のクラスの学習者の解釈は、「竹」に生命に対する不安を読むネガティブな解釈が学習者にも許容されることを示している。むしろ、こうしたネガティブな解釈を学習者につきつけ、学習者の内部に葛藤を生み出す点に朔太郎作品の現代的意義があり、それが前節で検討した作品解釈の変化にも反映されているのである。昭和三〇年代前半では忌避されていた朔太郎の「病的な、異常な感覚」が顕著に現れている「遺伝」「地面の底の病気の顔」「艶めかしい墓場」などが昭和五〇年代以降に積極的に採録されたのも、その現れであると言える。

4　まとめと今後の課題

萩原朔太郎の作品は、昭和三〇年代前半から本格的に始まり、昭和三〇年代末から高等学校教材として定着した。昭和三〇～五〇年代では「病的な、異常な感覚」として忌避された詩風の作品が、昭和五〇年代以降、学習者に葛藤を生み出すという積極的な意義を付与されたことを、「竹」の教師・研究者による作品解釈の変化と実践での学習者の解釈を例として指摘した。昭和四〇～五〇年代に進んだ採録作品の多様化に際しては、このような生命や自己に対する漠然とした不安や恐怖といった負の感情を感じさせる作品へと採録作品が広がっているのである。

本稿で検討した朔太郎作品の採録傾向の変化と作品の詩風との関連は、詩教材全般の傾向と比較して検討する必要がある。また、朔太郎作品の持つ形象性や音楽性などの要素と教材採録との関連についても未検討のまま残されている。今後の課題としたい。

〈注〉

＊1　「竹」と題された作品は『詩歌』大正四年二月号に三編が発表され、そのうち二編が『月に吠える』に採録された。本稿では、特に注記しない限り『月に吠える』所収の後編を「竹」とし、必要に応じて『月に吠える』での掲載順に「竹（一）」「竹（二）」として区別することとする。

＊2　今回の調査では、昭和五〇年度以前の言語編教科書を除く全教科書と、昭和五〇年度以降の大改訂時の教科書を対象とした。表は次のように示している。

1　学習指導要領改訂に基づく教科書大改訂の年度を基準年度として設定し、それ以外の年度での小改訂は一括して示した。ただし、昭和二六・二九年度については、改訂年度が学年によって異なる場合もあるため、改訂教科書がおよそ出そろった年度を基準年度として設定した。

2　表中の①②③は学年を、その後の数字は教科書使用開始年度を表している。

3　「採録教科書数」「採録出版社数」の欄は、「採録教科書数（出版社数）／総教科書数（出版社数）」の形式で示した。

4　昭和二六年度で使用された教科書が改訂されずに二九年度でも使用されている場合は、昭和二六年度に含めた。

5　昭和五八・平成七年度は、国語Ⅰ・Ⅱと現代文で刊行教科書数が異なるため、「採録教科書数」欄の総教科書数の表示を、「国語Ⅰ・Ⅱ（現代文）」とした。

＊3　『高等国語三訂版　国語学習指導　三年教授用資料』（三省堂　昭和三一年度　p.7）

＊4　伊藤信吉『現代詩の鑑賞（上）』（昭和二七年　新潮文庫　pp.265-267）

＊5　西郷竹彦「展開法による詩の授業―萩原朔太郎『竹』・村野四郎『鹿』」（『教育科学・国語教育』一八〇号（昭和四八年八月）・一八五号（同一二月）明治図書。引用は、『西郷竹彦文芸・教育全集30　詩の授業Ⅱ』平成九年　恒文社　pp.103-104）

＊6　瀬古正美「竹」（『作品別文学教育実践史事典・第二集―中学校・高等学校編―』昭和六二年　明治図書　pp.215-216）

＊7　小松郁子「萩原朔太郎」（『国語教材研究講座　高等学校『現代国語』第二巻（詩・短歌・俳句）』昭和四二年　有精堂出版　p.55）

＊8　『高等学校　現代国語Ⅲ　教授資料』（昭和四〇年度版　中央図書　pp.249-254）

＊9　『国語Ⅱ　学習指導の研究6　現代詩』（昭和六〇年度版　筑摩書房　p.6）

＊10　筑摩書房、前掲、p.8

＊11　加藤富一「詩をいかに鑑賞するか―朔太郎の「竹」と「遺伝」―」（『実践国語教育体系　第8巻〈理解〉韻文・民話の指導』昭和五九年　教育出版センター　p.148）

＊12　加藤、前掲、p.149

（広島大学大学院・広島経済大学）

〈表　高等学校教科書における萩原朔太郎作品採録状況一覧〉

作品	出版社	S26	S29		S34		S40		S50	S59	H7
青樹のこずえを仰ぎて	三省						③S40	③S43/S47			
	筑摩								②S49		
	第一									③S58	
遺伝	三省		③S28		③S31/S34					③S58	③H7
	角川								③S50		
	筑摩										①H6
	大修										③H7 ③H7
	明治										③H7
海鳥	中図				②S32						
大渡橋	大修					③S35					
	尚学						③S40	③S44/S47	③S50	②S58	
	好学							③S48			
	三省									②S58	
およぐひと	角川								③S50		
蛙の死	三省										③H7
蛙よ	秀英					②S35					
	実教							①S45			
帰郷	筑摩							②S46			②H7
	角川									②S58	
ぎたる弾くひと	角川									②S58	
黒い風琴	三省					①S35					
群集の中を求めて歩く	秀英						③S40	③S43			
	筑摩						②S39				
	第一										②H7 ③H7
	東書										③H7
月光と海月	角川										②H7
	三省										③H7
小出新道	三省	①S25	②S27		②S33						
	大教		②S29		②S32						
	昇竜				②S30						
	好学				②S31/S34						
	中図				②S32						
	明治					②S35					
	東書						①S38				
	実教						②S39	①S42	③S49		
	大原						②S39				
	旺文								②S49		
	学図								③S50		
	第一								③S50		
荒寥地方	中図				②S32						
公園の椅子	三省										③H7
こころ	学図								③S50	②S58	②H7 ②H7
殺人事件	明治										②H7
自然の背後に隠れている	東書			②S30	②S34						
	大日						①S38				
	光村								②S49		
	明治									③S58	
死なない蜻	三省										③H7
地面の底の病気の顔	右文									①S57	
掌上の種	書院							③S43			
新前橋駅	大原					②S35					
静物	三省									③S58	
題のない歌（抄）	大日						①S38				
竹（一）	実教			①S31	①S32						
	中図						③S40	③S44/S46			
	筑摩						②S39				
	大日							①S42/S45			
	明治								②S49	②S58	
	教出									②S58	
	角川									②S58	
	大修										②H7

作品	出版社	S26	S29		S34		S40		S50	S59	H7
竹（二）	三省		②S27								②H7 ③H7
	教出				②S32					②S58	②H7
	角川				②S33						
	好学					②S35	②S39	②S42			
	中図						③S40	③S44/S46			
	大日							①S42/S45			
	書院							③S43			
	教図							①S45	②S49		
	学図								③S50		
	筑摩									②S58	
	明治									②S58	
	光村									②S58	
	大修										②H7
	東書										②H7
	旺文										②H7
	第一										②H7
中学の校庭	筑摩									②S58	
蝶を夢む	三省		②S27								
	教図				①S31						
桃李の道	三省		①S27								
時計	明治				②S32						
	東書									③S58	
	三省										③H7
艶めかしい墓場	筑摩								②S49		
	大修									②S58	
	三省										③H7
鶏	教出								②S49		
猫	三省										③H7
乃木坂倶楽部	角川								③S50		
波宜亭	旺文								②S49		
浜べ	清水						②S40				
漂泊者の歌	三省		②S27								
	筑摩				③S34		②S39	②S42			
風船乗りの夢	三省								③S50		
	旺文									②S58	
緑色の笛	三省										③H7
山に登る	大原						②S39				
郵便局	三省				②S30						
	角川						③S40	③S43/S47			
	東書							③S43/S47			
郵便局の窓口で	中図								③S49		
	三省									③S58	
夢に見る空家の庭の秘密	教図		②S28								
	東書								③S49		
旅上	三省	②S26									
	秀英		①S27		①S32						
	中教				①S32						
	明治						②S39	②S42/S46		②S58	②H7
	尚学										②H7
	角川										③H7
採録作品数		2	8		12		13		16	17	16
延べ採録数		2	9		20		18		20	23	32
採録教科書数（種）		2/7	5/15		18/28		13/15		14/14	16/17(14)	22/26(12)
採録出版社数（社）		1/5	4/11		14/21		13/15		14/14	13/13	11/13

出版社略称

東書：東京書籍　大日：大日本図書　中教：中教出版　教図：教育図書　実教：実教出版　秀英：秀英出版
三省：三省堂　教出：教育出版　清水：清水書院　好学：好学社　光村：光村図書　大修：大修館
書院：日本書院　教研：教育図書研究会　大教：大阪教育図書　大原：大原出版　昇竜：昇竜堂
明治：明治書院　中図：中央図書　筑摩：筑摩書房　角川：角川書店　尚学：尚学図書　右文：右文書院
旺文：旺文社　第一：第一学習社